



ニホンヤマメ用の巣箱。エコツアーでは巣箱の観察会を行っている。右の穴からヤマメが入り出し、塩ビ管の中には苔や樹皮が詰め込まれ、ふかふかのベッドになっている。

栗橋町の商工会に企画提案する中で、酒造を経営する井上社長と出会ったのが一つのきっかけでした。井上社長は当時、私が初めて親や学校の先生以外で本気になって接してくれた大人であり助けてくれた恩人です。「鉄道むすめ」による商店街の活性化も井上社長と一緒に奔走してくれたお陰でした。その井上社長に17歳の時、茨城県の酒蔵に連れて行っていただき、米と水だけで日

ら鉄道ファンが訪れるイベントとして定着しています。一見してアニメと生き物や自然はつながりが無さそうに見えるのですが、私の中では全てつながっており、ゆるがなところは生き物や商店人等の個々を大事にし、その周りの環境や地域全体を守っていききたいという思いでした。

——売上を完全に回す流れのアイデアはいつ生まれたのですか？
アニメによる地域活性化に取り組んでいた時から感じていたのですが、行政からの補助金はいずれどこかのタイミングで無くなってしまいうことがありますよね。研究も同じで、研究費の確保を何かに依存して

——売上に完全に回す流れのアイデアはいつ生まれたのですか？
アニメによる地域活性化に取り組んでいた時から感じていたのですが、行政からの補助金はいずれどこかのタイミングで無くなってしまいうことがありますよね。研究も同じで、研究費の確保を何かに依存して



巣箱の正面に据え付けられたセンサーカメラ。巣箱へ出入りする様子を撮影し、個体識別に取り組んでいる。一つの巣箱に7個体が入っていく動画の撮影に成功しNHKでも放送された。

——ビジネスによる収益を資源の保全に還元する仕組みを作る考えはエコツーリズムと全く同じですか？
そうですね、エコツーリズムには高校時代から接しており、実は大学ではエコツーリズムの研究をしたかと思っていました。でも教授に相

本酒が出来ることにびびりし、現場の方々の熱量や声、雰囲気は圧倒されたことを覚えています。その時に、幼少期に手伝った米と、発酵を促す微生物をはじめとする環境全てが私の中で日本酒という形につながったのです。そして20歳の時に酒蔵をやることに決めました。今の時代に製造業ですか？と銀行に言われましたが、今こそめくもりのあるお酒や酒を囲む場、酒造りを知ってもらうことで自然に触れる機会が必要だと感じています。そして令和元年、28歳の時にやまね酒造を立ち上げました。酒造りを中心に酒造り体験や民泊、エコツアー、酒蔵コンサルティング、そして生物多様性・環境生態学研究センターを事業としてしています。

いると泣く泣くやめなければいけないことがあります。それはとても悲しいことだと思っていました。なので、ビジネスの力でうまく継続させる仕組みを作りたいと思に至りました。だから実は僕の目標はヤマメが生息するような豊かな日本の自然を守り残していくことであり、そのため的手段として酒造りを選んだというのが実態です。HPでも「やまね酒造は酒蔵だけと酒蔵じゃない、自然と生物多様性と共に歩む、環境保全を専門とした会社です」と謳っています。これまでの人との出会いの中で酒造りを選びましたが、生き物たちが醸し出すものなら味噌や醤油でも良いのです。

——今後の新たな展開としてラオスで新しいビジネスを始め、やまね酒造の保全モデルをラオスに持っていけたらと考えています。
きっかけは養老孟司先生が、ラオスはすごく貴重な生き物が生息する場所が無い、だから気づかれずに貴重な生き物がなくなっているという指摘をされていたのを本で読み、何かできることをしたいと思いました。

——今後の新たな展開としてラオスで新しいビジネスを始め、やまね酒造の保全モデルをラオスに持っていけたらと考えています。
きっかけは養老孟司先生が、ラオスはすごく貴重な生き物が生息する場所が無い、だから気づかれずに貴重な生き物がなくなっているという指摘をされていたのを本で読み、何かできることをしたいと思いました。

——自然を守るために、まずはビジネスの面からアプローチする、新しいなと思いました。
最後に一番好きな生き物を教えてください。
一番好きな生き物はじつはヤマメではなくナマズです(笑)。

——自然を守るために、まずはビジネスの面からアプローチする、新しいなと思いました。
最後に一番好きな生き物を教えてください。
一番好きな生き物はじつはヤマメではなくナマズです(笑)。

若林福成
1991年埼玉県久喜市(旧栗橋町)生まれ。高校時代にキャラクターコンテンツ「鉄道むすめ」を用いたまちおこしに尽力。大学では生物学を学び、大学院では経営学修士を修めアニメの舞台を巡るファンの行動について研究。2017年から立正大学地球環境科学部の外部研究員。新政酒造での修行を経て、2019年にやまね酒造株式会社を設立。奥むさし飯能観光協会役員。

——自然を守るために、まずはビジネスの面からアプローチする、新しいなと思いました。
最後に一番好きな生き物を教えてください。
一番好きな生き物はじつはヤマメではなくナマズです(笑)。

——自然を守るために、まずはビジネスの面からアプローチする、新しいなと思いました。
最後に一番好きな生き物を教えてください。
一番好きな生き物はじつはヤマメではなくナマズです(笑)。



若林福成氏
Fukunari Wakabayashi
やまね酒造株式会社 代表取締役
酒製造責任者
生物多様性・環境生態学研究センター長

収録日：2025年1月24日
収録場所：やまね酒造
インタビュアー：高野千鶴
(日本エコツーリズム協会事務局)



やまね酒造の定番商品「やまねのみのり」。ラベルにはニホンヤマメが描かれている。

タガメからアニメまで幅広い探求心
——どのような少年時代だったのでしょうか？
母方の祖母が埼玉県栗橋町(現久喜市)の米農家で、遊ぶ場所は主に田んぼで水路などに生息する様々な生き物と戯れる幼少期を過ごしました。田んぼの近くを利根川が流れ、釣り人も多く、釣りに来ていたおっちゃんから空き缶くらの太さのウナギが釣れた話やオイカワを唐揚げにすると美味しいと聞いて、茶色く濁った川の中の見えない魚がいるという不思議さに驚き、その時に探求心に火をつけられたのだと思います。
栗橋から上野までは電車一本で行けるので、国立科学博物館で週末に開かれていた研究者によるディスプレイトークに毎週末のように通いました。そこは一流の先生の最新の話や最新の話を聞く機会が、そこでタガメに出会いました。当時はまだ飼育



飯能産の西川材を用いた木桶。わざわざ西川材を木桶職人のいる小豆島へ送り製造を依頼。米は埼玉県産を使用し、地元産にこだわった木桶仕込みの酒造りを行っている。

することができましたので、つがいを飼って繁殖させ、子育ての様子を観察しました。その時にタガメのことを深く知り、タガメはタガメだけに揃っていない、周りの環境がいかに揃っていないかが大事だということに気づきました。一つのテーマや種に固執せずに周辺の幅広い自然に目を向けることを学んだ小中学生時代でした。
——高校時代は変って商店街の活性化に取り組みられていますか？
きっかけは何だったのですか？
私の住む栗橋町の隣、鷲宮町ではアニメ「らき☆すた」の聖地巡礼旅で大変多くの人が訪れるようになっていました。人口3万人程の町に、1月1日から3日までの鷲宮神社の参拝客数が9万人から47万人にまで増えたのです。これは地域に大きなインパクトがあり、訪れた人は食事や買い物で地元商店街に経済効果をもたらしました。地域がどんどん変わっていく様子を目の当たりにして自分も地域の活性化に関わりたいたいと思うようになったので、

自分の住む栗橋町も盛り上げたいと思い、高校2年の時に鉄道制服フェスティバル「鉄道むすめ」の「栗橋みなみ」を活用したグッズの開発やイベントの開催を地元商工会に企画提案しました。ちょうど商店街が衰退しつつあり打開策が求められていたころだったので、私の提案を受け入れてもらえました。「栗橋みなみ」を活用したイベントは今も続いており、昨年11月には全国か